

病める時 絵画の癒やし

ホスピタルアート 病院の壁、天井彩る

殺風景になりがちな病院内を色彩豊かな絵画などで彩る「ホスピタルアート」が注目されている。「快適性は二次」という考えが根強かった医療現場で、心身の癒やしを重視する意識変革が進んできた。ほかに、香りや笑いなどを取り入れ、患者に穏やかな気持ちで過ごしてもらおう病院やボランティアの取り組みも広がっている。

(中館聡子)

瀬戸内海の風景や子守歌で赤ちゃんをあやす母親の豊かな表情……。銅版画家山本容子さんが手がけたホスピタルアートの原画などを集めた展覧会が先月下旬、大阪市内の百貨店で開かれた。

日本にまだ根付いていないホスピタルアートを知ってもらいたいと企画。鑑賞していた女性(48)は「親の付き添いで病院に行くと、雰囲気だけで気がめいる。こんな絵があれば、心豊かに過ごせるでしょうね」と話した。

ホスピタルアートは、医療、福祉施設に絵画などの芸術を

取り入れ、患者や医療従事者らによりよい環境を作る取り組みだ。1970年代から英国などで本格的に始まり、日本でも2000年代以降、導

入する病院が増えてきた。

院(和歌山市)、高松赤十字病院(高松市)など計5か所の病院で、天井や壁に絵を描いてきた。

に親しみのある鳥々が描かれているのもあって、心を和ませているようだ」と話す。

ホスピタルアートに関心を持ったきっかけは、父親を病院で看取った際、ベッドに横たわって白い天井を見つめた経験。「父は、こんな景色を見て最期の時を過ごしたのか」と思い、アーティストである自分が何もできなかったことを悔やんだ」という。

事前に病院に赴き、医師や看護師、患者らから話を聞く。「老若男女が満足する絵なんてないけれど、かかわる人たちと討議し、求められるものを探し出した」と山本さん。

病院側も効果を実感する。高松赤十字病院では昨年の壁画完成後、患者と家族が絵について会話したり、待ち合わせ場所として活用したりする姿が目立つという。事務部長の高徳敏弘さんは「地元の人

約30の医療機関でホスピタルアートを手がけてきたNPO法人「アーツプロジェクト」(大阪府豊中市)は09年から、京都造形芸術大と連携し、学生が京都市立医科大学付属病院で壁画などを作る活動を続ける。外来利用者や病院職員らを対象に行った調査では、初年度に壁画を描いた地下通路の印象について「快適」と答えた人の割合は制作前の1・9%から79・1%に増えた。

同法人理事長の美術家森口ゆたかさんは「アートを導入する予算の捻出が難しい病院も多い。英国では医療費削減につながったというデータもあり、今後は成果の検証を進め、公的補助を含めた支援体制の充実を訴えていきたい」という。



木に腰掛けた女性らの絵を描く山本さん(2013年、和歌山市の和歌山県立医科大学附属病院で)―提供写真